

5月27日(日) 10:00~10:40 第一分科会:九州国立博物館ミュージアムホール

---

## 法隆寺西円堂薬師如来坐像に納入された鏡

国学院大学 植松 勇介  
UEMATSU Yusuke

---

『法隆寺大鏡』第54輯(1918年)には法隆寺西円堂の薬師如来坐像に納入された鏡が掲載されている。本鏡は1933年刊行の『法隆寺大鏡』第5冊にも掲載されるが、以後の図録や研究書には取り上げられていない。奈良時代の乾漆仏に納入された伝世唐式鏡でありながら、本鏡はほとんど注目されてこなかったのである。今回の発表ではあらためて本鏡を紹介すると共に、その成立過程を想定し、あわせて納入時期の再検討を試みる。

本鏡は円形で、界圏を設けない。半球状の鈕を作り、大小の花文を表す。花文(大)の左右には葉文が広がっており、花文(小)の上には鴛鴦文を配す。間地は霰地になっている。

京都市の泉屋博古館と中国の河北省塩山県文物管理所には本鏡と一部の文様の共通する鏡が収蔵されている。泉屋鏡と塩山県鏡は面径・形状・文様が同一で、本鏡とも鈕や花文、鴛鴦文が共通する。しかし、この二面には界圏と外区があり、周縁も八稜形になっている。また、花文(大)の左右に広がる葉文が表されず、霰地もない。

花文(大)の左右に広がる葉文に関しては本鏡のように表すのが当初の意匠だろう。本鏡では鏡背全体の鋳上がりに一体感があり、この部分が後から付け加えられたとは思えない。形状や霰地に関しては泉屋鏡や塩山県鏡が原型に忠実で、むしろ、本鏡の製作段階で改変されたと考えるべきだろう。奈良時代の鏡には八花形で外区もあった鏡を内区だけの円鏡に改めた例があり、霰地も唐時代の鏡では同心円状に並ぶが、奈良時代の鏡では不規則で、やはり規則性のない本鏡の霰地も日本で加工されたと思われる。つまり、唐時代に内区が本鏡、外区と形状が泉屋鏡および塩山県鏡と同一の鏡が製作され、この初鋳鏡から数次にわたって踏み返し鑄造が繰り返されるなか、同型鏡にいくつかの系統が分立し、一つの系統では花文(大)の左右に展開する葉文が削除されたのだろう。他方、奈良時代の日本には別系統の鏡が舶載され、これを踏み返すにあたり、内区のみの円鏡に改変し、霰地をえたのではないか。本鏡はこうして作り出されたと考えられる。

西円堂の薬師如来坐像は地付きから頭部までが空洞になっている。本鏡の納入が像底の開口部より行われたとすれば、2メートルを超える巨躯を移動させる必要があり、納入の時期も限られる。①薬師如来坐像の造立時、②永承3年(1048)に西円堂が損壊し、薬師如来坐像を大講堂に移座した時、③建長2年(1250)に西円堂が再建され、薬師如来坐像を還座した時を考えられるが、②はあくまでも仮安置であり、納入の意義を見出しがたい。また、仏像に鏡が納入された事例を集めると、納入されているのはほぼ同時代の鏡である。③ならば、鎌倉時代の鏡が納入されていたはずだろう。仏像に鏡を納入する信仰習俗は平安時代以降に広まるが、本鏡は薬師如来坐像の造立時に納入されたものと思われる。